【2】 研究の経過と本年度の取り組みについて

(1) 平成４年度（１年次）の取り組み

前研究テーマの「からだづくり」を通した取り組みのなかで、高等部の生徒には「ことば」や「表現する力」に落ち込みがみられ、改善が難しいという考察を得た。そこで１年次には、生徒の実態を諸検査や観察により把握・分析し、「ことば」や「表現する力」に落ち込みがみられるという確かな傾向をつかみ、その原因を究明することを研究の中心においた。

その結果、意志交換能力・集団参加・自己統制というコミュニケーションに関係の深い分野の未熟さや未発達、未習得があることが明らかになり、我々はコミュニケーションに視点をあてた指導の必要性を再認識・共通理解した。そして、指導にあたっての基本的な姿勢を検討し、指導の手がかりとするコミュニケーション指導内容表の作成に着手した。また、指導場面と集団編成の工夫についても検討し、本年度の実践の道筋を作った。

(2) 本年度（２年次）の取り組み

２年次である本年度は、昨年度の経過をふまえて次のような取り組みを行った。

① 高等部でねらうコミュニケーションの力を検討した。それをもとにコミュニケーション指導内容表の手直しを行い、試案を作成した。

② 諸検査をもとに、生徒の発達段階をおおまかに分類し、発達段階にあわせた適切なアプローチはどうあるべきかを検討した。昨年度までと異なり、本年度は発達年齢が６～７才の生徒が占める割合が多くなり、指導方針や手だてについても検討・共通理解を随時行った。

③ 社会的自立へむけて、コミュニケーションからのアプローチが生徒の力をどう高めていくかという研究仮説をたてた。また、めざすコミュニケーション像を「相手を意識してすすんで自己表現する子」とし、研究の構想図を作成した。

④ 諸検査や観察をもとにして、生徒一人ひとりのコミュニケーションに関する課題を一覧表にあげ社会的自立にむけての個人目標と、コミュニケーションに関する目標を決定した。

⑤ 授業実践を深め確かなものとするために、授業づくりの観点を明らかにし研究場面での授業実践に取り組んだ。本年度は特に「生活一般」における授業づくりを重点として掲げ、校外学習を中心とした単元の設定や指導計画の検討を行った。あわせて「生活一般」の学習内容を個に応じて補強しコミュニケーションの基盤となる力を培う場としての「課題学習」の授業づくりにも取り組んだ。

⑥ 個人事例の対象生徒を決定して、コミュニケーションに視点をあてた取り組みによる社会的自立度の変容を追った。これは、指導方針や手だてが適切であったかどうか等の考察と本研究の評価につながり、来年度への展望を導くものとなった。なお、個人事例の対象生徒の決定は昨年度の「生活一般・職業からみた実態」によるグループわけの中から「理解度や表現力の低いグループ」「重度の障害グループ」「言語不明瞭グループ」「心理・対人関係に問題があるグループ」をとりあげ研究の最終年次まで在学する高等部１、２年生を各グループから１名ずつ選出したものである。

（グループ編成の意図や詳細は、平成４年度研究集録を参照）